

日常的な被共感経験についての研究

——尺度の検討と自己・他者受容との関連——

田 中 雄 大

【問題・目的】

共感の心理学的研究において、これまで共感される側（被共感）に着目した研究は少ない。被共感には共感される体験と、自他の分化を促す共感されない体験（被共感不全）の2つの側面が想定されるが、これらの基礎的知見を提供する研究はなかった。また、心理臨床場面における、自己・他者受容に対する被共感体験の有効性について、さまざまな報告がなされながらも、実証的な検証がなされておらず、その背景に被共感を測定する尺度が作成されていないことが挙げられる。本研究では、研究Ⅰにおいて被共感・被共感不全の基礎的知見を得ること、研究Ⅱにおいて、被共感経験尺度を作成し、共感される経験が自己・他者受容に与える影響について数理統計的に検証することを目的とした。

【方法】

研究Ⅰ：日常的な被共感・被共感不全・被共感不全後の変化について、134名の大学生・大学院生を対象とした自由記述による質問紙調査を実施し、M-GTAの手法を用いてそれぞれカテゴリー化を行った。研究Ⅱ：研究Ⅰの知見をもとに、4因子構造を想定して作成した被共感経験尺度と自己・他者受容尺度を用いて、397名の大学生・大学院生を対象とした質問紙調査を実施し、パス解析・分散分析によりその関連を検討した。

【結果・考察】

研究Ⅰでは、日常的な被共感体験・被共感不全体験・不全体験後の変化についてカテゴリーが抽出され、日常のどういった体験が共感されている、あるいは共感されていないと感じているのかについて基本的な知見が得られた。また被共感不全体験後の変化について否定的な側面と自他の分離・他者理解という肯定的な側面を見出し、否定的な要素を含まない“不一致”による被共感不全が自他の個別性の認識という変化に繋がりがやすいことが示唆された。研究Ⅱでは、「被共有経験」と「被共有不全経験」という当てはまりがよく、内的整合性の高い2因子構造の被共感経験尺度が得られたが、想定された4因子構造をもつという結果は得られず、項目の表現の修正の可能性も示唆した。また、FDES（共感性）とNPI-S（自己愛）から構成概念妥当性の検討がなされた。パス解析の結果では「被共有経験」は自己・他者受容を促し、自己受容は他者受容を促すという臨床的知見を支持する結果が得られた。「被共有不全経験」はネガティブな影響もちつつも、男性における自己・他者受容の一部に肯定的な影響も与えていることが示唆された。